

「書なきにしかず」

羽 田 明

読書について、孟子は「ことごとく書を信ずれば、書なきにしかず」という名言を残している。もっとも、注釈家によれば、書は儒教の経典である五経のひとつで、周代の史書として、もっとも重要な書経を指したものらしい。ただ、学者のうちには、一般の書物の意味に理解した人もないではない。それに、このような解釈が間違いとしても、書経に対してさえ批判的であった孟子の、書物一般についての考え方は、自明といってよい。

師弟相伝を旨とした旧中国の学問でも、長い年月の間には、新説が旧説にとって代り、新しい学風が古い学風を一新した。文学や芸術の分野でも、事情はそれほど違わなかった。批判精神こそは、文化の発達の原動力だったのである。「ことごとく書を信ずれば」という孟子のことばが、現代においても少しもその意義を失っていない理由はそこにある。いな、現代においてこそ、その重要性はいっそう大きいと思われる。

柄にもなく、孟子に托して、このような読書論を試みた直接の動機は次のようである。近ごろ、教養部の学生諸君のために購入すべき新刊書の選択に立会つたとき、あらためて、わが国の出版文化の隆盛に目を見張る一方、おびただしい書物のはんらんにいささか戸惑いを感じたことがそれである。もっとも、新刊書といつてはほとんどなく、いわば活字に餓えていた戦中から戦後の一時期にかけてのことを思えば、現在の状態もむしろよろこぶべきかも知れない。

ただ、「過ぎたるはおよばざるが如し」のたとえ通りで、この恐るべき書物のはんらん状態では、あれこれと読みかじるのが精一杯で、大方の諸君にはじっくり書物を熟読などできないのではないかと心配にもなる。それどころか、意気沮喪して、もっぱら娯楽的な読書に逃避する人々も出てくるのではないか。こうなれば、孟子とは別の意味で、「書なきにしかず」といわざるをえまい。この危険を避ける工夫は、人によっていろいろ考えられよう。流行につられないうで、内外の古典ないし古典的な書物を読むこともそのひとつであろう。自然科学はともかくも、人文科学や社会科学、とくに人文科学に志す人々にとっては、それがもっとも大切なことだと信じる。

(教養部教授)